

サハリン白鳥ツアーでの収穫

藤 卷 裕 蔵

1994年の夏にサハリンの南部と中部、北緯50度までの各地で鳥類を調査する機会があった。私と松尾武芳さん、ウラジオストクの生物学・土壌学研究所のネチャエフ博士、それに私たちの案内役を務めてくれたボヤルキン氏と4名で2週間ほどの旅行であった。この時は、草原も森林も緑で、多くの鳥が産卵、抱卵、育雛の最中であった。調査を終えて、ほっとしたと同時に、また別の季節にもう一度来てみたいと思っていたが、その願いが次の年に実現した訳である。

今回の旅行は5月上旬で、春とはいえ北海道よりもずっと寒かった。ツナイチャ湖やレピャジエ湖など前の年と同じ所にも行ったが、湖畔の落葉広葉樹はまだ葉を出しておらず、草も前年の枯れたままで、景色は大分違っていた。一部の湖沼はまだ氷に覆われており、風は冷たかった。まだ冬という感じであったが、残念ながらハクチョウの多くは既に北に渡去しており、あまり多くはなかった。少し残っているハクチョウも非常に警戒心が強く、日本で餌付けされている同じハクチョウとは思えなかった。でも、いくつか代表的なハクチョウ類の渡り中継地を見ることが出来たのは、大きな収穫であった。また、アインスコエ湖など、前回には行かなかった所にも訪れることが出来た。

東海岸沿いを北上し、西海岸に出る時には、島を横断した。この時、道の両側にはササが見られたが、丈は短く、ちょうど北海道太平洋側のミヤコザサの様であった。確か、サハリンのササはチシマザサの筈であるが、北海道の多雪地帯のものとは全く違う種のように見える。サハリンの自然に関して、色々の文献を通して知ることが出来る。しかし、北海道の自然を見なれているせいも、ササの例のように、文献から得た知識と実際に見る自然とはかなり違うという印象である。「百聞は一見にしかず」と言う諺がある。今回の旅行での体験は、サハリンの鳥の文献を読む上でも非常に参考になる訳で、このことも今回の大きな収穫であった。

今回の旅行のもう一つの収穫は、全旅行中楽しく過ごせたことである。小樽からのフェリーは17時間もかかり、初めは退屈するのではないかと思っていたが、参加者の皆さんとの話は尽きることなく、長時間の船旅も苦にならなかった。移動に使ったバスはオンボロ、田舎のホテルもオンボロ、バスの走る道路はデコボコで、日本では経験出来ないような旅行であったが、終わってみればこれもまた楽しい体験である。

今回の旅行では、鳥類の専門家であるズドリコフさんがずっと同行してくださり、よい通訳にも恵まれ、また現地の旅行会社のスタッフも色々と気を遣ってくれた様で、この企画は成功だったと思っている。最後に、私たちの旅行をお世話していただいたこれらの人にお礼申し上げたい。